

「森銑三刈谷の会」だより No.6

発行 2022年3月19日(月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00

会場 刈谷市中央図書館 参加自由・資料代100円
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@catch.ne



1977年10月、教え子たちに招かれて帰郷の際の記念写真。前列左から森銑三、高松徳市、後列左から稲葉悦三、尾崎銑三。森82歳、尾崎69歳。これが最後の帰郷。(尾崎資料)

第6回(2022/2/26)尾崎隆さん「森銑三と亀城尋常小学校代用教員時代の教え子たち」16人

尾崎隆さんは森銑三先生の教え子・尾崎銑三さんのご子息です。御尊父の銑三さん(先生と同名)が残された写真や関係書類のコピー等を見せていただき、お話を伺いました。

森先生は1918(大正7)年、亀城尋常高等小学校5年生の学級担任として、教え子たちと出会いました。男子16人、女子22人計38人の学級です。この年の7月、鈴木三重吉主宰の『赤い鳥』が創刊されました。森先生は教え子たちの綴り方を『赤い鳥』に投稿し、入選作が誌面に載っています。先生はその年11月末に大道社の月刊誌『帝國国民』の編集者になるために苦慮の末、学校を辞

め、上京します。別れに当たって子どもたちは切ない思いを歌に詠んでいます。「先生とお正月にはあそぼうとたのしんだのもむだとなりけり」「写真にうつった先生のお顔眺めてはさびしい心なぐさめませう」。このことは後に雑誌『ももんが』(1984.11)に向田豊作が紹介していますが、なかなか手に入らない貴重な資料です。そのコピーが尾崎資料にはきちんと残されていました。

左上記念写真に先生と一緒に写っている尾崎・稲葉・高松の三人は、藤沢の先生宅をよく訪問し、1979年からは入院先に見舞いに行った際の写真もたくさん見せていただきました。『「森銑三刈谷の会」だより』No.5で紹介した「偉大な業績一目で」(刈谷ホームニュース1984/8/4)の「森銑三展」には尾崎資料がたくさん出展されており、病床の先生を励ます目的で開催されたものと分かりました。先生は翌1985年3月7日に逝去され、三人が葬儀に参列している写真も拝見し、稲葉さんの弔辞(『ももんが』1986.4)も読み合わせました。(神谷)

今後の予定

2022/3/19 鈴木「森銑三と渋沢栄一の孫阪谷俊作」
2022/4/16 飯田「鷹見泉石像とそのモデルの泉石と渡邊崋山」

兄銑三は森三郎の作品の原点

山田 宇多子

「森三郎の作品を読む会」で、作品に触れるうち、兄・銑三の影響が大きいだろうなと思うことが、しばしばありました。前回「森銑三刈谷の会」で、銑三さんと亀城尋常高等小学校の教え子との深いつながりを知って、ここに思っていた通りの原点があったと分かりました。

たった八ヶ月くらいの関わりで、生涯にわたり両者を繋げたのは、銑三がお話をいっぱいしてあげたこと、一緒に唱歌を歌ったり、綴り方や短歌を作らせ、それを投稿し評価をしてあげたことだと思います。その頃、三郎は亀城尋常小学校の2年生、兄が手にして来た『赤い鳥』を家族で読んだそうです。銑三が担任の子どもたちに語ったお話を三郎も家で聞いていたでしょう。

私自身の体験ですが、小学3年の頃、担任の先生に「ニルスの不思議な旅」「幸福の王子」などいろいろな話の読み聞かせをしてもらいました。その時の様子や物語を70年ほどたった今でも鮮明に覚えています。そして国語の時間に短歌を作り褒めてもらったことも……。

他のことは忘れても、そういう思い出は、心の中に深く印象付けられ、その後の生き方や興味にも影響を与えているように思います。それがあったから、銑三先生と教え子たちとの関係が、生涯続いたのだと思いました。